

## 昭和の南海地震体験談

氏 名:坂本 美代子(さかもと みよこ)

生年月日:昭和7年6月11日

地震を体験した場所:田辺市

当時の家族状況:父、母、兄2人、弟2人、妹1人



### 1) 地震発生時の状況

当時 14 歳、家で家族7人寝ていた、揺れで起きて、裏の田んぼに出た。

次男は、役場に宿直に行って留守。

地震後、警防団に入っていた父が、火事の心配しながら、火の始末をくれぐれも言いながら、出かけた。

田んぼで居る時「津波だ！」という声が聞こえたので、長男に言うと「デマや！」と再び布団に入った。家の前の役所勤めの小父さんが「津波だ！逃げろ！」と線路の上から叫んでいたのと、海鉄砲が鳴ったので、これは…と思い、米と、チケット箱を抱えて、表に回った時には、膝まで水が来ていた。

線路向いて行こうとするが、段々水位が上がって腰位まで濡れたので、重くて米は離れた。

普段ならスッと上がる道が、その時何故か、分からなかったもので、遠回りして線路に行くと、兄が、大きな声で私を捜して「美代子！美代子！」と名を呼び続けていたが、「はい」と返事しようにも、震えて、声が出なかった。

足袋も草履も脱げている事にも気づかず、足は凍えて焚き火をしてもらっても、しばらく感覚が、無かった。

### 2) 津波襲来時の状況

夜が明けるまで全く見えず、ただ、長男が、戻って来た父に、「あが(自分の)、家無いぞ！」と言っているのを聞いて、薄っすら見える影が、いつもの場所と少しずれているが、家はあると思っただけで言わずにいて、夜が明けて見えるようになったら、家の代わりに船が2隻座っていたので、驚いた。

流出跡に、父が、長男誕生記念に植えた冬柿と、井戸のポンプと、碾き臼だけ残っていた。

### 3) 家族の行動・被害

父は、警防団で火事の注意に浜に行ったが、途中、浜を見に行った漁師が、“ブツブツ”と浜の水面が言い出したので、これは「津波くる」と思って、叫んで回ったそうで、父たちも、まさか自分の家が被災すると思わずに、浜の地区の人を、津波から避難させて居たようだ。

役場に居た次男は、無事、役場あたりも地震だけ。地震時、家に居た女3人と長兄は鉄道線路へ。下の弟2人は、遠くの山に逃げているのが遅くて、「死んだ」と思っていた。2人は、父が戻る頃、降りてきて無事を確認、

#### 4) 集落・周囲の被害

近所で生後80日の女の赤ん坊、6歳の男の子、19歳の女性、23歳の青年、48歳の女性が死亡、集落全体では7人死亡。

19歳の女性は、一旦線路まで逃げている、家の前で、「これ、被ってきてよ！」と薄い夏蒲団を頭から被っていて、「いいの、被って！」「あはは」と、互いに笑いあったのが最後、その後、家に何か取りに戻って流されてしまった。

線路の上に居た時、家族と離れた人が、家族を呼ぶ声を、いまだに忘れられない。

溺死した人がほとんど、着ていた服や着物、下着まで脱げて仕舞い、丸裸であったことが印象的だった。

#### 5) 地震・津波後の生活

余震が怖くて一旦、近所にある父の、兄の家に行ったが、又、大きな余震で、飛び出して、女子供5人が、山奥の親戚の家に、その日のうちに疎開(約4ヶ月間)。親戚に付いた時、「たわし水」を飲むように言われて、飲んだ。

父と上2人の兄は、片付けと家の再建をした、彼らは、父の兄の家で、寝泊りした。

疎開先の、親戚の家が百姓だったので、食べるものに苦労はしなかったが、麦踏みや、牛の世話や、堆肥を中入れするのは辛かった。

支援物資は金で買った記憶がある。リヤカー引っ張って金を叔父に借りて買いに行った。

父は、S21に死亡。後を、引き継いだ長男が、苦労した。

#### 6) 次の災害への備え

海側の高台に嫁に来て、65年前とは随分と環境整備されて、当時の面影は全く無い。

“枕元に着る服を積んでから、寝ること。”一応リュックは色々入れて押入れに入れて用意しているが、前の南海道地震・津波では、逃げる途中の人が沢山亡くなったから、もう、逃げないつもりしている。

#### 7) その他

その日のうちに疎開したから、直接、見た記憶は少ないが、14歳という年齢から、色々人から聞いた事の記憶があり、芳養小学校の裁縫室で、亡くなった人の合同葬をした事、亡くなった19歳の女性の同級生が参列したなどの話を思い出した。

護岸竣工記念で建てた、井原地区の潮位標

道路舗装で埋まってしまって、下部の文字は  
読むこと出来ない

現在の路面から、33cmの位置に、潮位刻  
みがあるが、この地区の、当時の潮位は、5m  
の記録ある。



津波被災概念図 大西 信雄氏

「北海道大地震被災記録と教訓」より掲載

左上:線路前、太枠で囲んだ「原崎家」が実家

